

波音録音レポート 高知県土佐清水市編

2010/09/18 加登 匡敏

2011/04/08 改訂版

【ことのきっかけ】

5月下旬、作曲家 セツ矢博資氏より、新曲の作曲のために波音の音響分析をしてもらえないかと依頼を受けた。作曲のヒントとして様々な波音の分析データを収集したいというのだ。

すでにセツ矢氏の手元には様々な波の効果音集や、波に関する文献が集まっていた。

さっそく効果音集を聴いてみたのだが、どれも効果音作成者(出版者)の強い意図が反映されており、実際の波音(海で聞く波音)とは遠くかけ離れたものであった。実際に効果音制作の現場では、目的の効果音を録音するよりも、本物らしく聞こえる模造音を録音して加工したり、録音したものを積極的に加工して効果を強調する場合が多い。

しかし、作品の中で波の効果音を使うのではなく、波の音響分析が作曲の資料となる今回の依頼にはこれらの効果音の素材は合致しないと考え、実際に波音がとれる場所へ出向き録音することとなった。

【ロケハン】

実際に録音に出かける場所を決めるにあたって、

- 1) 幹線道路が近くになく、もしくは付近の交通量が極端に少ない場所であること
- 2) 砂浜、岩場など海岸の形状の種類が豊富であること
- 3) 湾ではなく直接大海原に面している地形があること

以上の要件を満たすような海岸を考えたところ、日本海沿岸もしくは太平洋沿岸の地域がよいだろうということとなり、個人的によく訪れる高知県土佐清水市周辺の海岸に決めた。

【高知県土佐清水市】

高知県の南西に位置し、四国最南端の足摺岬がある。

台風がよく通過する地域であり、台風接近時には足摺岬の様子がよくテレビ中継されている。



高知県土佐清水市

【日程】

録音は2010年8月16日から18日までの3日間で行った。

神戸からは約500 km、高速道路は県内の途中（須崎東）までしか通っていないため、高速と長い下道（山道と海岸線がつづく）を進むこと約7時間で到着する。



GPS ログによる神戸から土佐清水までの移動軌跡

【フィールド録音の記録】

第1日目(8月16日)

【主な録音場所】

足摺岬、その周辺

白山洞門

大津の磯



1日目の移動軌跡

まずは四国最南端の地である足摺岬へ向かう。土佐清水市内から車で山を1つ越えること約30分で到着する。とても日差しが強く、黒色のマイクスタンドはとても高温になる中、今回の初録音を行う。



足摺岬



長い石段の途中から

続いて足摺岬の近くにある白山洞門へ向かう。長い石段を下りること約10分、白山洞門に到着する。

自然にできた岩のアーチから太平洋が望める絶景の地である。また、砂利浜に打ちよせる波の音がアーチで反響し独特の響きを形成している。

行きは酔いよい帰りは...、機材を担いで登る帰りの階段は想像以上の体力を要した。



白山洞門

午後からは大津の磯へ向かった。様々な形の岩があちこちにぼこぼこあるこの磯では、潮の満ち引きで海面から出る岩の形も変化に富み、岩にぶつかる波の音も変わる。

その変化は実に興味深く、ずっと聞いていても飽きない。



大津の磯

海面に表れる岩を次々と飛び越えていき、沖の方へと進む途中、岩場で足を滑らせ海面へジャンプすることに。

とっさに機材（マイク、レコーダー）を守ろうとした結果、右足を岩で切り血だらけとなる。本当に幸いなことに機材は無事であった。

「危ないよ！」という忠告も聞かず沖にある岩場へ向かったのには理由があった。海面からぼこりとでる岩場に四方八方から押し寄せる波音を、4本のマイクでサウンド録音できれば、「この独特の波音を後で部屋でも再現できるはずで、絶対楽しいはずだ！」という願望をどうしても押さえることができなかったのである。目的の録音が達成できたことに満足感を得られたが、その代償として傷口に塩水がしみわたる。しかしながら、しみわたったのがマイクロホンでなくて本当によかったと肩をなでおろした。



負傷した事故現場の岩場

この事件の一部始終はレコーダーにしっかりと録音されており、何度聞いても壮絶な状況である。

第2日目(8月17日)

【主な録音場所】

竜串海岸
見残し奇岩海岸
片粕海岸



2日目の移動軌跡



グラスボートからの竜串海岸

2日目は竜串海岸から録音を開始した。この日の天気も快晴。強い日差しが照りつける中、何回も何回も海岸線を往復し、最適な場所を探した。

次に竜串からグラスボートに乗って南に位置する見残し海岸へ向かう。

見残しという地名は弘法大師が竜串を訪れた際にこの地を見残したことに由来するのだそうだ。

長年の波食、風食によって生み出された無数のひだと穴のあいた岩肌が特徴的である。また、この岩肌の隙間に波が打ち寄せ、中で共鳴することで波とは思えない独特の響きが生み出されていた。



見残し海岸の奇岩



共鳴を生む奇岩

太平洋から来た波が奇岩にあたり、激しく砕ける音はとても迫力がある。

録音場所を何度もかえて、様々なバリエーションの波音を録音することに努めた。

見残し海岸は予想よりも遙かに広く、全てを録音してまわるのは結構骨が折れた。



奇岩に打ち寄せる波



奇岩から望む太平洋

目の前に広がる太平洋は本当に壮大であった。

大海原を眺めながら録音を続けるうちに、ふと太平洋へ出て録音してみたいという気持ちが芽生えた。「思い立ったが吉日！」港へ向かい漁師さんに交渉することにした。

夕方からは竜串海岸から少し西へ移動し、片粕海岸周辺で、海岸に打ち寄せる波を録音した。

砂浜、砂利浜、岩場と海岸線を移動しながら様々な波音の録音を行った。



片粕海岸の岩場

第3日目(8月18日)

【主な録音場所】

清水港沖

その他海岸線



3日目の移動軌跡



船頭のやすださん

前日、地元の漁師さんをお願いして、沖に船をだしてもらえないかと交渉すると、漁に出て港に帰ってきたあとだったら構わないと快諾してもらえた。朝 10 時に清水港で待ち合わせすることとなった。

最終日も好天に恵まれ、沖に波があるのか心配になりながら清水港を出港。あっという間に沖合いにでた。

沖への移動中ずっとビデオカメラを回していたせい、30分ほどで激しい船酔いになる。

波のことばかり考えていたせいで、船酔い対策は全く念頭になかった。



波のない清水港周辺



船上のマイク

沖に出たところでようやく波が感じられるようになる。ありがたい反面その波によって船酔いは加速するばかりだ。しかし、船頭さんに言わせると今日は本当に波がないとのこと。

いいポイントを見つけてエンジンを止めてもらってマイクスタンドを高く伸ばして録音を開始する。マイクスタンドの揺れをとめようと踏ん張りたいが、船酔いで力が入らない。

移動して録音ポイントを決める。船のエンジンを止める。GPS ロガーによる現在地の緯度経度情報をメモして録音をはじめ。次のポイントを探しに移動する。といった作業を1時間余り続けたところで録音は終了した。



船上からの太平洋



船酔いと闘い

沖合いの波音というものは、「はっきり言って波音には聞こえない」というのが今回の結論である。波音がしてないということではなく、言葉で説明しがたいが、実に興味深いものであった。

ただ我々が普通、波音といって思い浮かべる音は、砂浜であったり、岸壁であったり、岩であったりと全て海水が何かと接触して出来上がったものなのである。こんな当たり前の話でも考え直してみるとおもしろいものだ。

船酔いを限界まで我慢しながら、やっとの思いで上陸する。すると猛暑で猫ものびている。今すぐ隣で横になりたいものだ。



暑さでのびる猫

午後からは土佐清水市の西側の海岸線をまわり、ポイントを決めては波の録音を続けた。

午後6時頃、土佐清水市の波音録音は無事に終了した。

【録音機材の紹介】

マイクロホン Seide PC-Me (防湿処理品)
レコーダー Zoom R-24

今後、機材の画像や、フィールド録音用の改造記事もレポート追加掲載の予定です。

また、実際に録音してデータの一部も公開を予定しています。